

Title	存在 - 論理的な種 : 動物たちとともに考えるために
Sub Title	Onto-logical species: thinking with animals
Author	Mohácsi, Gergely
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2010
Jtitle	活動報告書 Vol.4, (2010.) ,p.27- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章 : シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20110300-0027-2

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トランスナショナルな移民の生活感情：文化人類学的アプローチ Emotional Terrain of Transnational Immigrants: a Cultural Anthropological Approach

7

開催日 2010年7月20日
企画 宮坂敬造（哲学・文化人類学班）
講演者 Karl G. Heider（サウスカロライナ大学）、Kang Yoonhee（ナンジャン工科大学）、
松岡秀明（淑徳大学）、鄭暎恵（大妻女子大学）、宮坂敬造（哲学・文化人類学班）

2010年7月20日に、文化人類学グループでは、「トランスナショナルな移民の生活感情：文化人類学的アプローチ」と題して研究セミナーが開催された。世界的に有名な Jean Rouch の民族誌映画『Jaguar』が上映された後、South Carolina 大学名誉教授の Karl G. Heider 先生が人間の移動における感情に関する映像人類学的解釈を行った。また、慶應義塾大学の宮坂敬造先生には文化人類学の立場からディアスポラと生活感情について、シンガポールの Nanjyan Technological University の Kang Yoonhee 先生には韓国の「教育移民」の調査についてご発表いただいた。移民研究の立場から淑徳大学の松岡秀明先生、社会学から、大妻女子大学の鄭暎恵先生による貴重なコメントがあり、予定時間を大幅に超えるまで、活発なディスカッションが続いた。（モハーチ・ゲルゲイ）

A research seminar titled “Emotional Terrain of Transnational Immigrants: a Cultural Anthropological Approach” was held on July 20, 2010. Speakers discussed the variety of emotional and social difficulties that immigrants and other people in diaspora have to face. Case studies included migrant laborers in Ghana and Indonesia and Korean students in Singapore.



存在—論理的な種：動物たちとともに考えるために Onto-logical Species: Thinking with Animals

8

開催日 2010年8月30日
企画 モハーチ・ゲルゲイ、宮坂敬造（哲学・文化人類学班）
講演者 Heather Swanson（University of California）、Anders Blok（University of Copenhagen）、
渡辺茂（脳と進化班）、宮坂敬造、モハーチ・ゲルゲイ、鈴木康則（哲学・文化人類学班）

8月の最後の月曜日に、文化人類学グループの主催で、2つの新進分野の若手研究者をお招きして研究会が開かれました。動物研究（animal studies）の先駆的組織とも言える University of California, Santa Cruz から Heather Swanson 氏、また、近年力を注いでいる北欧の科学技術社会論（Social Studies of Science and Technology, STS）の代表者として、コペンハーゲン大学の社会学者の Anders Blok 博士の発表を聞かせて頂きました。

2人の発表に先立ち、動物と人間の関係を追究したグレゴリー・ベイトソンの思想にみる「論理性」について、グループリーダー宮坂敬造先生が発言しました。その後まず、Swanson 氏が、アメリカ及び現在実施中の北海道の鮭ます孵化場でのフィールドワークをもとに、科学技術が介する人間と動物の関係を考察しました（“Differences that make a difference: Distinctions of wildness and practices of doing salmon”）。次いで、Blok 博士は、捕鯨問題のグローバルな展開を取り上げ、「非人間的カリスマ性」の新たなアプローチの可能性について概説しました（“How many (super-) whales are we? Notes on the ontological politics of non-human charisma”）。

研究会の後半には、本拠点リーダーの渡辺茂先生に動物実験

を行っている当事者と、また哲学グループの鈴木康則氏に存在論の視点から、科学技術の日常実践における人間と動物の相互関係に関するコメントをいただきました。塾内外からの参加者の積極的な発言による、各分野を乗り越える学際的な議論で、動物を対象とした科学技術が媒介する論理と感性の相関性に光が当てられたと感じました。（モハーチ・ゲルゲイ）

On August 30 2010, two young scholars invited by the anthropology group presented their work concerning the relationship between humans and animals as mediated through technoscientific practices. Heather Swanson talked about her ongoing research on salmon hatcheries in Hokkaido. Anders Blok discussed the ontological aspects of the so-called ‘whale-wars’ and the role of non-human charisma in it.

